

多文化共修科目の可能性

—4年間の振り返りと展望—

岡 智之（東京学芸大学）

1. はじめに

本学で多文化共修科目を開設して4年、担当者や学生の意識も単なる異文化理解から多様性理解へと広がり、深まった。また、多様な課外活動やヒューマンライブラリーなどを通して、さまざまな多文化社会の課題に関わり、実践する方向も見出している。本発表では、こうした4年間の活動を振り返るとともに、今後、共修化の拡大や、地域との連携によって、大学を多文化共生社会の中軸とするという展望を明らかにする。

2. 本学の多文化共修科目の概要

留学生と日本人学生が共修する科目は、先駆的には、信州大学をはじめとした大学で始められ、発展してきた。最近では、北海道大学、東北大、立命館大などの先進的な事例が、坂本・堀江・米澤（2017）『多文化間共修』に紹介されている。ここでは、多文化間共修の意義を、「学生の異文化に対する感受性や対応能力を高め、文化の多様性を理解し、グローバル化に対応するスキルを育成する」としている。

これら全国の動向を受け、本学でも、2015年度に「多文化共修科目」4科目が学部共通科目として開設され、「多文化共修科目 A 異文化理解とコミュニケーション」「多文化共修科目 B 多文化社会とコミュニケーション」の2科目を筆者が担当している（岡2016,2019）。受講者は、2015年度春が日本人学生17、留学生19、計36名で、留学生が若干多かった。以降、2015年秋26（日本人9、留学生17）、2016春14（日3、留11）、2016秋8（日5、留3）、2017春6（日3、留3）、2017秋7（日3、留4）と年々、受講者数の減少が見られた。2018年度春は木5限にしたところ、20名（日15、留5）と人数が回復した。2018年度秋学期は、日本人学生が3人で、留学生が13名（7ヵ国）と人数が逆転したが、今後とも、授業内容の改善とともに受講者数の回復が大きな課題である。

授業のトピックとしては、在日外国人問題（在日コリアン、難民問題など）、沖縄基地問題、言語教育問題、グローバル化の問題などを取り上げてきた。ゲストスピーカーや講演者として、聴覚障がい者、視覚障がい者、セクシュアルマイノリティ（トランスジェンダー）、難民（クルド人、ロヒンギヤ）などを呼んでお話を聞いたり、体験学習やフィールドワークとして、朝鮮大学校訪問と学生との交流（毎学期）、群馬県大泉市・太田市のブラジル人学校訪問と交流（2015～2017年度）、群馬県館林市ロヒンギヤ難民集住地訪問（2018年春学期）、朝鮮初中級学校の公開授業見学（2018年秋学期）などを行ってきた。最終発表としては、学生それぞれの関心からプロジェクトを作り、発表を行っている。これまでのグループの発表テーマとしては、「外国につながる子どもの支援」「難民問題」「在日コリアン問題」「沖縄基地問題」「LGBTと性教育について」「障がい者とのかかわり方」「イスラム教について」などの多彩なテーマで行われている。2018年春学期、秋学期の授業の最終日には、「異文化理解とは何か」「多文化社会の課題解決に向けて」というテーマをたて、ワールドカフェ形式で、ディスカッションを行っている。学生たちは、「異文化理解や、多文化共生は、単に外国人とのコミュニケーションをするということにとどまらない。セクシュアルマイノリティや障がい者などの理解も異文化や多様性の理解として、重要視していかなければならない」などの気づきがあり、今後の学生生活や社会生活に生かしていく知恵としてくれているようである。

また、2016年12月には、本学で初めてヒューマンライブラリーを開催した。在日外国人（クルド難民、イスラム教徒留学生、地域の外国人）、セクシュアルマイノリティ（LGBT、Xジェンダー）、障がい者（視覚、聴覚、発達障がいなど）、うつ病、難病などのマイノリティや、教育支援者を「本」として10～15冊招いて「読者」と対話する取り組みである（坪井他 2018）。第1回目は、学内の学生支援部署の協力を得て、「本」やスタッフを確保していったが、全学にスタッフ募集の説明会を行い、多文化共修科目の課外活動としても位置付けて、学生スタッフを確保した。スタッフは読者と本をつなぐ「司書」の役割として、「本」との「読み合わせ」を行ったり、当日の介助などをやってもらったりして、より深い学びが行われたように思う。大学でも地域連携事業として認定されて、予算を得ることができ、広く地域にも呼びかけた。本イベント以外にも、2017年5月には国際交流合宿（草津）でHLをおこなったり、6月平日の夜の時間帯にミニ・ヒューマンライブラリーを行ったりした。2017年12月の第2回開催では、80名の参加者が集まり、濃密な対話が行われた。多様性理解のイベントとして、教育活動や地域の活動に幅広く生かしていける今注目の取り組みである。2018年12月第3回目は、50名弱の集まりになったが、今後、年1回のイベントではなく、小規模ではあれ、春学期にもいろいろな形態で行い、授業とも連携させて、継続した取り組みとしていくことが課題である。

3. 今後の展望

今後の課題として、受講者の確保のために、授業内容の改善も必要である。春学期と秋学期の内容があまり変わらなく、秋学期の受講者が減る傾向にあるので、2019年度からは、秋学期の内容を「多言語社会とコミュニケーション」（仮称）として、言語に焦点を絞り、留学生の言語や少数言語などを学ぶような内容に変えたいと考えている。また、課外活動を通して、地域社会に働きかけていくような課題解決型のプロジェクト（現場生成型実践研究（佐藤他 2006、工藤 2016））をめざしていきたい。

また、現在、大学全体で、共修科目を拡大していくことに向け、検討し動き出している。より多くの日本人学生が留学生と共修し、異文化理解や多文化共生、また市民性を身につけていく場として大きく広げていくことが必要である。

参考文献

- 岡 智之（2016）「多文化共修科目の挑戦：2015年春学期「異文化理解とコミュニケーション」の授業実践と振り返り」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』第67集、pp377-397.
- 岡 智之（2019）「多文化共修科目4年目の振り返り～文化理解の変容に着目して～」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』第70集.
- 工藤和宏（2016）「異文化間教育学の実践とその研究手法」佐藤郡衛、横田雅弘、坪井健編『異文化間教育学体系4 異文化間教育のフロンティア』明石書店、pp101-116
- 佐藤郡衛・横田雅弘・吉谷武志（2006）「異文化間教育学における実践性—『現場生成型研究』の可能性—」異文化間教育学会（編）『異文化間教育』第23号、20-36
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修』学文社
- 坪井健・横田雅弘・工藤和宏（2018）『ヒューマンライブラリー 多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』明石書店